

リンボウ先生の

オー人事録。

⑤ 先見、壮志、無私

文イラスト 林望

大正時代、東京府下品川町(現品川区)の町立小学校には一台のピアノも無かった。そこに一人の若い音楽教師が赴任し、ピアノ購入の為の寄付を募ったが奏効せなかつた。そこで町長に直訴したが「何れその内に考えておこう」という答えであつた。ところが三月ほど後、町立の五小学校すべてに、千円以上もするドイツ製のピアノが届けられた。町長が独断で五六千円も支出して贈つたのだつた。不満を鳴らす議員らを前に町長は「六千人の子供達に喜んで課業を受けさせる為ならば、五六千円など」といふ金は何でもない」と論じた。今の二千万円は下らない額である。この町長は漆昌巖という人である。



昌巖は、嘉永三年木曾川

中流大江村に生を享けた。家は自作農であつたが、十一歳にして仏門に帰依し、郷里の圓心寺に参学、明治元年十九歳の時に出て東京増上寺の

学寮に学んだ。總て二十五歳の砌に品川の法禅寺住持に任ぜられたのを機縁として、以後品川の人となつた。が、時代はこの逸材を一浮屠には留めて置かなかつた。彼は、品川の馬車会社が当時衰微していたのを引き受けて馬車鉄道会社を設立し実業界に転身する。更に機械製氷会社を創設し、選俗して愈々実業に専念、品川電灯会社、品川白煉瓦合資会社等を興した。同時に品川町会議員を振り出しに政治に参与し、遂には明治三十五年衆議院議員に当選。大正六年には品川町長を兼務する。冒頭のピアノの美談はその町長時代の一逸話である。

大正九年、昌巖は代議士を辞して町政に専心、特に教育に意を用いた。そして町立小学校地を町有にし、最先端の設備を導入するなど先見的な教育理念を以て事に当り、かの大震災に際しては、陣頭に立つて町民を飢餓混乱から救つた。一方昌巖はまた娘の雅子をして荏原婦人会を創設せしめ、新時代の有為高徳なる女性の育成を志した。後の品川女子学院である。昌巖は、財は惜しげもなく教育等の為に散じて身は質素を極め、恬淡とした晩年を送つて、昭和九年八十五歳の寿を以て易簣した。

仕事は好きですか。



スタッフサービスグループ